

私が声を発する間も必要性も余りないからである。会話における口数は、母国語や外国語を問わずに相対的なものであり、聞き上手もまた必要である。

ところで一般に、おしゃべりな人ほど英会話の上達は早いと言われる。私の経験から考えても、これは正しい命題と思われる。好きこそものの上手なれである。では、無口な人は英語がうまくなれないのであろうか。そもそも「英語がうまい」とはどういうことであらうか。一般に、実用英語とは英語を「話すこと」と捉え、英会話学校もテレビの英会話番組も話す訓練に重点をおいている。しかし、実際の英会話においては、自分が話すよりも聞く場合の方がはるかに多い。実用英語の上達法は聞く訓練が基本にあると思う。いくら話せても相手の言っていることが聞き取れないのでは会話にならない。聞き上手は英会話上手になれるのである。超整理法などの執筆で有名な、あの野口悠紀雄氏も最近の著書「超英語法」(講談社)で、自身の経験に基づいて同様の考えを述べている。その中で、「聞ければ自動的に話せる」とまで言い切っているが、その理由として、日常英会話では、相手に助けられながら話すことができるからと述べている。まったく同感である。

今は便利なことに、インターネットを通じて生の英語を容易に聞くことができる。例えば、日本版 Yahoo サイトで、「Online News Hour」を入力して検索すると、アメリカの公共放送局 PBS が提供するニュースサイトが見つかる。最新のニュースが Transcript 付きで聞けるので、音声と照合しやすい。通常のニュースの他に Science report のコーナーもあるので、ぜひ一度、視聴されることをお勧めする。

とにかく、浴びるほど英語を聞くことが上達の秘訣のようである。

理系研究者にとっての外国語

武次 徹也

私がこれまでに学んだことのある外国語は、英語とドイツ語である。ドイツ語は大学の教養の頃に第二外国語が必修だったので履修し、大学院の入試で必要だったので学部4年の夏にも集中的に勉強した。英語とドイツ語は文法上類似点が多く、今でも辞書さえあればある程度は読めると思うが、その後必要に迫られることは全くない。英語さえきちんと読み書きできれば、少なくとも研究で困ることはないといえる。しばらくして大学院の入試の科目から第二外国語がなくなったが、英語以外の外国語を学ぶということは特定の目的がある場合を除いて、今では教養としての意味しかないように思う。4月に八王子セミナーハウスに出かけて1年生に科目履修について説明しているとき、将来研究者を志望する場合にはドイツ語を取っておいた方がよいのか、という質問を受け、少し懐かしい感覚を覚えた。

学部4年になって研究室に配属されると、英語との付き合いが日常的になってくる。研究の情報を得るためには英語で書かれている論文に目を通さなければならないが、最初は慣れないので斜め読みができず、まず日本語に全訳してから内容を理解しようとしていた。だんだん目を通さなければならぬ論文が増えてくるとすべてを全訳することは不可能となり、それでも論文をコピーし続けているうちに自然と斜め読みができるようになっていたようだ。そのうち斜め読みすらしない論文を大量にコピーして満足するようになり、コピー時にページをめくったときチラッと見える情報が重要なんだと研究室の仲間と笑っていたが、更に年月を重ねると、コピーした論文をどこに片付けたかわからない状態になった。何度か整理を試みたことがあるがとてもしつこく、今に至っている。最近では pdf file としてパソコンの中で文献を整理できるようになってきたので、

以前のように物理的に場所を取ることはなくなったが、とりあえずどこかにしまいこんで安心してしまいう傾向は変わらないようである。

大学院も学年が進んでくると、博士号取得の条件が気になってくる。私の場合、博士号を取得するためには専門誌に3報の論文が受理されることが条件として課されていた。学生にとって、英語で論文を書くというのは一つの大きな壁だと思う。論文とは単なる英作文の積み重ねで仕上げるものではなく、全体として見ても細部を見ても論理構造のしっかりとした構築物でなくてはならない。さらに日本語と英語の違いもある。教官にとっては、学生が書いたものを直すよりも最初から自分で書いてしまう方が速いのだが、それでは学生はいつまでも自分で英語論文を書けるようにならない。そこで、論文を書く上での基本的手順やコツを教えた上でとにかく学生に頑張ってもらって論文を書いてもらい、教官が赤でチェックし、それを見て学生が原稿を改訂する、という作業を地道に繰り返すことで伝授するしかない。最初のうちは学生が書いた文章は全滅することもあるが、注意を受けたポイントを着実に身につけていく学生は、5報目くらいでかなりまとめた論文を書けるようになる。

私自身は結構のんびりしていて、博士課程2年生になった春に最初の論文を投稿したが、その論文はそのままでは受理されず、レフリーからかなり注文が来た。新しい反応理論を提案したかなりチャレンジングな論文であり、投稿した専門誌もかなり水準の高いものだったので、今考えると無理からぬ反応であった。その後、レフリーの指示に従って新たに追加の計算を行い、論文を改訂しようとしたのだが、その作業が実に大変だった。実は、この論文は指導教官であった平野恒夫先生(現名誉教授)が非常に力を入れていた研究をまとめたもので、ほとんど先生が書かれた論文であった。そのため論文としての完成度が高く、部分的に手を入れようとするとも全体の調子が崩れてしまうように思われ、全体としての整合性や文章の格調を保ちつつ改訂することは当時の自分には至難の業であった。結局、この論文は、博士課程3年生になってから2報に分割することにかなり大胆に書き直し、その過程で自分の論文となった。博士課程の最後の1年間、平野先生によるマンツーマンでの丁寧な指導のもと英語論文をひたすら書きつづけた1年間であり、先生の論文スタイルを徹底して伝授して頂いた1年間であった。

博士号を取得して半年経った9月、アメリカのアイオワ州立大学にポスドクとして留学することになった。英語で論文を書くことについては少し自信が芽生えていたが、英語でコミュニケーションをとることについては全く自信がなかった。読み書きや英文法には自信があったが、それだけでは英会話は成り立たない。頭で英作文して話していたのでは追いつかず、最初は単語を一生懸命並べて意思の疎通を図ることが精一杯で、文法的に正しい文章で会話をするという余裕はまったくなかった。研究について細かい議論を行うことも最初は困難で、隣の部屋にいる先生と電子メールで議論したこともある。幸い、受け入れてくれた教授は日本人の研究者を何人も受け入れてきた先生で、あまり主張はしないが仕事はしっかりするという日本人の特質をよくわかってくれており、辛抱強く付き合ってくれた。アメリカにはちょうど1年間滞在したが、英会話能力は身についたとは言えない。しかし、何とか意思疎通を成立させるための技術と根性は身についたように思う。

その後、数年を経てお茶大化学科にお世話になることになった。お茶大に赴任して1年半経った頃、文部省在外研究員としてケンブリッジ大学に半年間派遣して頂けることになった。滞在先の研究室の先生は年齢も比較的若い若い先生だったが、精力的にバリバリ仕事をこなすエネルギー

シュな先生で、論文も相当書かれていた。英語の文献を次々読みこなし、レポートを書くように投稿論文を書きあげている様子を横で見ている、母国語で研究できることを心底うらやましく思った。

英語とドイツ語

杉田 孝夫

英語との出会いは、小学5年のころ、岩手の小さな町のバプティスト教会の日曜学校の英語教室に誘われて通いはじめたときが、英語との出会いの最初であったように思う。アメリカ人の宣教師の奥さんが、子供達にサルの絵を見せながらマンキー、マンキーと言うのを復唱したことをよく覚えている。最初に覚えた英単語がこのマンキーだったかもしれない。しかし英語よりも、毎週教会に行くとかける絵入りの聖書の一節を記したリーフレットに異国を感じ、奥さんが食べさせてくれる手製のケーキにアメリカへの憧れを抱いたことのほうが記憶に残っている。

中学になれば英語を勉強することになる。私はNHKのラジオの基礎英語と続基礎英語を一年ずつ聞いて、そのあと英語会話を1年間聞いたが、どの程度効果があったのかは覚えていない。それで英語ができるようになったという気分には全然ならなかったし試験の結果がよくなったようにも思えないので、たいした効果はなかったのだろう。英語を勉強しているという事自体に満足感を感じていたのかもしれない。

高校には行って、やたらに細かい文法の先生と疎に解説をしない講読の先生のリズムについていけなくなって、すっかり英語嫌いになってしまった。嫌いだからといって勉強しないわけにもいかないから勉強はするが、熱がはいらないから結果はよくない。ますます嫌になっていった。

大学に入って、これで点を取るための勉強をしなくていいのだと思うと、天国にいるような気分だった。それほど受験勉強が嫌いになっていた。西洋史を専攻しようと思っていたので、とにかく英語の本を読めるようになりたいと思い、ペンギンブックスを買って読みはじめた。ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』が一冊を最後まで読みとおした最初の小説だった。3年のころにはE.H.カーの『歴史とはなにか』を外国書講読の時間に読んだ。4年のころには、卒論のための英語の専門書を何冊か読んでいた。でもドイツ現代史をやっているのにもっぱら英語の文献に頼っているようでは本物ではないなと思いつつ、ドイツ語がさっぱり読めないのでいろいろして過ごしていたように思う。

学部を卒業してから一年間、指導教官にピンソンのドイツ近代史を逐語訳しろといわれ、愚直にも一年間、800ページもある大著を全部訳した。レポート用紙が10センチ以上の厚さになった。こんな課題を出す方も出す方だが、それをその通りやる方も相当どうかしている。しかしそのおかげか、英語の本を読むことは随分楽になった。しかしますますドイツ語からの逃避傾向が強くなったように思う。

ドイツ史をやろうと思ったのは、そんなにしっかりした理由があったわけではない。第二外国語にドイツ語を選んだので、ドイツ史になってしまった。ドイツ語を選択したのは、きっとその当時読んでいた本の影響だろう。1960年代から1970年代にかけての読書の世界は、まだまだ大正教養主義を基礎に育った知識人たちの書物が圧倒的に多かった。教わる先生たちも半数は旧制高等学校、旧帝大卒で、戦後の語学教育は話にならんといいことをよく聞かされた。それで考えたのは、学部の4年を旧制高校、修士課程を旧制度大学、博士課程を旧制大学院とずらして考えて、

到達水準を自分で設定して、勉強すればいいのではないかと強がってみたりした。その後の半生を、あとから振り返ると、その通りの過ごし方をすこしのんびりとやったような感じがする。

もっとも私が指導教官に選んだ先生たちは、学部でも大学院でも旧制から新制に切り替わる頃に高校や大学に入った人達だった。かれらはそろって、フランス、イギリス志向だった。だから「君は随分古いね」とよく言われた。複雑な気分であった。卒論は同輩や先輩は革命的な話を主題にするので、ナチズムを選んだという具合で、そのころからへそ曲がり癖が強かったようだ。

ただナチズムを選んだのには、もっともらしい理由がないことはない。一つはフランクルの『夜と霧』を読み、丸山眞男の『現代政治の思想と行動』を読んで、普通の人々が集団になるとなんでこんな狂気に向って行くのだろうかという疑問であった。異常を正常とに分けて、自分は正常のほうにいたいと考えて怪しまない態度を、限り無く怪しむ癖がいつのまにかついてしまった。まあ別に後悔しているわけではないからいいけれども、いまだに素直になれないところは自分でも如何ともしがたい。この性格が自分では気がつかない形で随分と損や遠回りをしているかも知れないと思うとちょっと鬱になる。

それなりに自己流に独学的にドイツ語の勉強をしてはいたが、ドイツ語をきちんと勉強するようになったのは、大学院に入ってからだと言える。ゼミで数年の間、カール・シュミットの『独裁』を読んだ。20代半ばから30代の半ば過ぎまでの10年余り、上智のブライテンシュタイン先生と毎週土曜日の夕方、ベッケンフェルデの法制史の論文などを読んだ。ここで18世紀ドイツの固有の性格をいろいろ教わったし、ドイツ語の読み方の基本を学んだように思う。お茶大に就職してからしばらくそれまでの生活と全く違ってしまい、ドイツ語を忘れてしまいそうな感じになり、ヤバイと思ひ、また上智のアルムブルスター先生ところで、先生が退職してプラハに行くまでの数年間、毎週木曜日アドルノの『否定弁証法』を読んだ。この二人が私のドイツ語の先生だったといえる。ドイツ語のニュアンスを生かす日本語の訳語を充てるコツを教わったように思う。

ドイツ語が多少読めるようになったなという実感を持つようになったのはごく最近のことである。2000年から2001年にかけて、ミュンヘンで10ヶ月過ごす機会を得た。ドイツの空気の中で日本語をできるだけ遮断してドイツ語の本を可能な限りたくさん読むことに決めた。日本語の本はいっさい持っていかなかった。政治と思想と歴史の本だけを読むことに決めた。3000ページくらい読んだ。これですこし学問的な意味での精神の平安が得られたような気がする。しかし東京に戻って来たら、とたんに読書の速度は落ちた。いまは「あの時間をもう一度」という思いである。

日本語の文章も下手で、語学音痴で語学コンプレックスの人間が言うのもなんだが、外国語を学ぶ意味は、日本語と日本文化をより相対的に理解する上での大きな効用があるように思う。

翻訳という作業はそうしたことの一切を含んでおり、その意味で、いい文章のいい内容の本を、きちんとした日本語でどう甦らせるか、という作業は、とても勉強になる。どうにも翻訳不能な意味やニュアンスをどう日本語で表現するか、これはその作業をする者の教養と経験を総動員しての挑戦である。だが、単なる翻訳とはまったく違った創造的な営みでもある。これは、英語の本を英語で理解する、ドイツ語の本をドイツ語で理解する、ということとはまた違った読み方である。